

[読む館長講座②]

東北歴史博物館館長講座概要

2022年5月28日

「東北グローバル考古学 part2—原始・古代のロマンと科学—」②

北京原人と「日本原人」の謎

阿子島 香

はじめに

現在、地球上に生きるすべての人々は、新人です。すなわち「ホモ・サピエンス」という同じそして唯一の動物種に属しています。誰が私達を造り出したのかといった哲学的あるいは神学的な考察はさておいて、ここに至るには、約 700 万年という途方もない長さの道がありました。その進化の過程は、どのようであったのか、また何がいつ起きたのかについては、今もなお、世界中の研究者たちが解明に取り組んでいます。そしてまた今もなお、多くの謎が残されています。今日は、多くの謎の中から、特に有名な二つを取り上げて、人類の進化の道筋、また日本列島に渡来した最初の人々という視点を含めて、考えてみたいと思います。ひとつは「北京原人」、もうひとつは「明石原人」です。

周口店からの旅路

今回の副題は「周口店からの旅路」としました。東アジアにおける人類進化の大きな鍵は、やはり北京原人にあります。研究の歴史の中でも、つとに重要で、1920年代から多くの課題を提起しました。原人という進化段階、最初の火の使用、ユーラシア前期旧石器の東と西、狩猟と人間性の発達などがあります。それに加えて、化石人骨の謎の失踪というミステリーは、未解決のまま 80 年以上が経過しています。

それでは、北京原人遺跡の現状から見ていきましょう（スライド多数）。周口店洞窟遺跡群は、北京市の南西 42km に位置しています。北京市中心部から、車でおよそ 1 時間半位のところにあります。周口店という名の村落の西側に、「龍骨山」の丘陵があります。ここは龍骨という名が示すように、古くから化石が見つかる場所として知られていました。化石は漢方薬の原料としても珍重されていました。一帯は石灰岩の地質で、化石の保存が良い条件になっています。考古学上の洞窟遺跡として、20 数カ所の地点が知られています。最も重要で著名なのは「第 1 地点」で、またの名を「猿人洞」とも言います。中国語では今も原人のことを猿人と称します。ホモ・サピエンスは「智人」です。

第 1 地点では、原人が生息していた時代の層が、全部で 40m 以上もの厚さに堆積しています。第 1 層から第 13 層までに分けられています。各種年代測定によって、約 46 万年前

～23 万年前とされています。厚い灰や炭化物の層が何枚もあり、これは原人が火を使用していた証拠です。出土石器は、総数 10 万点以上といわれ、脈石英が多い石材組成です。大型のチョッパー、チョッピングツール、ハンマーストーン、小型のスクレイパー各種、「尖状器」各種などの、組合せで構成されます。

第 1 地点は、史跡公園の中でも、恒久的な屋根を掛けて整備され、原人出土層の現地展示が公開されています。広い駐車場から巨大な胸像を見て、遊歩道をすすみ、コンクリートで固められた階段を降りていくと、猿人洞のなかへ入っていき、厚い堆積層を間近に見ることができるようになっていきます。洞窟内部を回遊する木道と柵に沿って、各所で層位のように、発掘区の状況が見られるようになっていきます。第 4 層にあたる分厚い灰層が印象的で、黒く炭化物も観察できます。(現地写真は、2019 年 12 月館長撮影)。

周口店の各地点を総合すると、人類進化と旧石器文化変遷の段階が示されるような、重要な遺跡といえます。最下層では 70 万年前との数字もあります。第 13 地点、第 15 地点、第 4 地点 (新洞)、第 22 地点でも、前期旧石器から中期旧石器にかけての文化層が調査されました。第 1 地点の近くの山頂には上洞 (Upper Cave) があり、山頂洞地点と称されますが、こちらは新人が残した後期旧石器時代の遺跡です。山頂洞も、屋根をかけて整備され、発掘地点と堆積層を観察することができるようになっていきます。

チョッパー・チョッピングツール文化圏

原人の時代には、ユーラシア大陸は東西の二つの文化圏に分かれていたという学説は、提唱者のアメリカ人研究者の名前から「モヴィウス・ライン説」と言われています。西はヨーロッパ、アフリカ、中東、インド西部の「ハンドアクス文化圏」に、東は中国、東南アジア、インド東部の「チョッパー・チョッピングツール文化圏」に分かれます。韓国の全谷里で 1979 年に初めて両面加工ハンドアクスが発見されるまで、世界考古学の定説となっていました。(令和 3 年度館長講座概要 第 2 回参照)。

周口店遺跡は、まさにこのチョッパー・チョッピングツール文化圏の典型と見なせる石器の技術と組成を持っています。周口店第 1 地点でも、大型の片刃礫器、両刃礫器などが、砂岩などの素材で製作され、一方で小型のスクレイパー類各種、「尖状器」(先を尖らせた石錐状の石器で、中国考古学の分類用語) などが、石英系の材料で製作されます。両方のタイプ(欧米考古学では、heavy duty tool, light duty tool と称していますが)の石器群が、共存しているというのが大きな特徴です。第 1 地点では第 13 層から第 1 層まで、両者の割合や、それぞれの中での分類には、層によって多様な様相が見られますが、下から上へ向かって系統的、進化的に、方向を持つ変化(定向進化)というわけではなくて、各層それぞれの内容の個性といえるようです。

技術的には、特に小型の石英系の石器で、「両極剥離」という手法が広く認められます。台石の上に石核を置いて、上からハンマーで加撃すると、剥離した石片(剥片)に上下双方に、打面とバルブ(加撃点付近のコブ)とリング(表面の同心円状のウネリ)が残ると

いう技術です。また調整加工を施す時には、両面から加工して、横から見るとジグザグ状になる「交互剥離」による刃部形成が広く適用されています。

世界遺産「北京人遺址」

周口店の洞窟遺跡群は、人類史上の「普遍的価値」により、1987年にユネスコの世界文化遺産に登録されました。前回館長講座では、世界遺産について詳しく解説しましたが、こちらが周口店の登録文書です（スライド）。中国語と英語の双方で記述があります。北京原人の頭蓋骨は、衝撃的な大発見として世界の古人類学界に受け入れられ、そして日中戦争のなかで数奇な運命をたどり、今も行方不明のままです。一方、出土遺跡は、中華文明の黎明を語る、国の宝という位置づけになっています。

1921～23年にアンダーソン、ズダンスキーにより人類の歯が発見されて、1927年から発掘調査が本格的に開始されました。1929年12月2日に、裴文中らが第1号頭骨を発見しました。その時の写真が残っています。これらの初期発見の化石は、シナントロプス・ペキネンシス（北京の中国原人の意）と名付けられましたが、現在はホモ・エレクトスの中に含まれています。亜種レベルでは、ホモ・エレクトス・ペキネンシスとも呼ばれています。猿人、原人、旧人、新人の人類進化段階では、原人にあたります。

新中国になってからも、発掘調査が行われてきました。現在までの発掘で、40体分以上の人骨が出土しましたが、人体の骨格が揃って出土するのではなく、各部位がバラバラになって出土する場合が大半です。周口店では、頭蓋骨と歯の化石が多いという特徴があります。骨が破片になっている事例から、かつては食人の風習が想定されたこともありました。現在では否定され、骨にはハイエナなどの噛みあとも確認されています。頭蓋骨の特徴を簡単に見ますと、眼窩上隆起が発達して、しばしば耳の側まで伸びる、前頭葉は未発達で、前頭部は後ろに下がる、頭頂部に稜がある、後頭部は発達して突出する、などがあります（スライド）。脳の容量は900～1200ccです。（現代人は1400～1500cc位です）。

戦争と北京原人の運命

一般にはどんなふうに関心をもたれているだろうかと、試みにグーグルで「北京原人」関係を検索してみました。館長が驚くところでしたが、日本映画「北京原人」が、けっこう上位でヒットし画像も多く出ました。1997年の東映系の配給で、大きな製作予算だったそうです。詳細には触れませんが、北京原人が現代に蘇る不思議なストーリーです。そのとき映画館で見た記憶が戻りました（笑）。今回講座内容との関連では、言葉をあやつれる進化水準と、行動や思考における、論理性や構造的認識、時系列的予見性とは、連動して発達したという、旧石器考古学での精神性の進化をめぐる議論を思い起こします。すなわち映画では、ホモ・サピエンスの進化に伴う「後期旧石器の革命」（後述）の、遙か以前に、現代人的な行動理解があるということで、違和感を覚える点でした。もちろん、映画の中のことですから、それでよいのですが・・・。

さて、1929年に周口店において北京原人第1号頭骨が発見され、国際的な研究が進行していました。1930年代の周口店は、化石人類研究の最前線であったといっても、過言ではないでしょう。1935年頃に、裴文中はフランス留学に旅立ち、ブルイユの下で研究することになり、周口店では賈蘭坡（Jia Lanpo、ジャランパ）が現場の指揮をとる役になったようです。賈蘭坡は、1936年11月には、第3号頭骨を発掘しました。この複製は、周口店の博物館にも展示されています。しかし、1937年には七・七事変（盧溝橋事件）が起きて、日本による侵略戦争が激化し、発掘調査は中断されることとなりました。

日中全面戦争はやがて第二次世界大戦に拡大しますが、その中で北京原人の化石骨は、行方不明になり、現在も所在不明のままです。この事件については、さまざまな文献があります。ここでは、樋口（1969）により概略を述べるにとどめます。1941年に日米関係の悪化の中で、化石をアメリカに移送する計画が立てられました。当時、化石は北京協和医学院（スライド）で保管、研究されていました。協和医学院は、ロックフェラー財団に関わる機関でした。同年、アメリカ人は本国に退避し、ワイデンライヒも最後の引き揚げ船に乗りました。12月、化石は木箱に梱包され、アメリカ海兵隊の基地がある海岸の秦皇島から、貨客船プレジデント・ハリソン号で送られることになっていました。しかし同船は、真珠湾攻撃による開戦後に、日本軍に拿捕されて、到着しませんでした。日本が制圧していた北京で、日本軍が協和医学院に化石の接收に向かいましたが、すでに化石はどこかに消えていました。

戦時中、また終戦後に、日本、中国、アメリカは、それぞれ強力に行方を探索、追及しましたが、解決は得られず、実にさまざまな説が存在し、流布しています。古人類学の化石の研究は、当時から精密な模型を製作して進めることが常道でしたから、その後は製作されていた模型による研究が主となっています。人類学にとどまらず、現代史上の悲劇的事件です。

中国科学院古脊椎動物与古人類研究所

ここで、私が中国の考古学界と交流を積み重ねた中から、ある研究所で開催された国際学会についてご紹介したいと思います。中国科学院に、古脊椎動物与古人類研究所という組織があり、中国における古生物学、化石と古人類研究、また旧石器時代考古学の中心的な研究機関になっています。この研究所の前身は1929年に設立されました。北京原人第1号頭骨と同じ年で、その発見に先立ってのことでした。近年、5年ごとに記念国際会議を開催していますが、私は80周年（2009）、90周年（2019）に参加する機会があり、研究発表も行いました。ここでは、2019年12月の会議から、説明したいと思います。この時期は、新型コロナ禍のパンデミックが始まる直前で、まだ現在の状況のようになるなど、全く予想もしませんでした。しかし武漢では、もう患者が見つかっていて新型の肺炎の報道がはじまっていました。この会議の後、海外に出て研究や学術交流を進めることが事実上できなくなり、もう2年半にもなっております。

古脊椎動物与古人類研究所（Institute of Vertebrate Paleontology and Paleoanthropology）は、英語の頭文字をとって、IVPP とも呼ばれます。国際的には、IVPP で通用します。IVPP の学者たちは、中国全土で研究活動を進め、それぞれの分野のリーダー的な活躍をしています。東北大学考古学研究室とは、故芹沢長介名誉教授の時代から、学術交流があります。近年は、旧石器考古学の李超榮先生、高星先生たちと学術交流を深めています。李先生は東北大学の総合学術博物館客員教授として招聘することができ（2008）、大分県早水台遺跡と河北省・山西省境の許家窯遺跡との前期旧石器の比較研究を行なうことができました。副所長の高星先生は、「日本旧石器学会」など日・中・韓・露の4ヶ国から構成される連合学会「アジア旧石器協会」(Asian Paleolithic Association, APA)でも交流しています。ちなみに私は APA 事務局長を1期務めました。APA の言語は、どの構成国の言葉でもない英語というところが、アジア外交的にも重要です。

「中国科学院」ですから、国家的な中核であり、地方政府に属する研究機関との関係も、政治同様にそれなりのものがあります。専門学術雑誌「人類学学報」、やや一般向けにも読める「化石」などを刊行しています。IVPP は、北京動物園の近くにあつて、研究所には博物館も併設されています。ロゴマークは、スライドのように、恐竜モチーフです。ちょっと脱線してすみませんが、昨年夏季の当館特別展「ジュラシック大恐竜展」には、6万4千人を超える多くの皆さんにご来場いただき有難うございました。観覧された方にはご記憶と存じますが、巨大なティラノサウルスの骨格標本も見ていただきました。IVPP の附属博物館にも、古生代から新生代までの古化石コレクションの展示が充実しています。ティラノサウルスは、中国語で「霸王竜」で、さすがに文字の国です。代表的な国民的京劇に「霸王別姫」というのがあります。2019年の記念企画展示では、チベット自治区の3000m以上の高原地帯での旧石器発見のコーナーもありました。ホモ・サピエンスの拡散は、とどまるところがないという感想を持ちました。極限的地域へも進出できる文化的装備の賜物ですね。

創立の頃の先人たちと、重鎮の登場

さて、IVPP 創立90周年記念（北京原人第1号頭骨発見90周年）国際会議は、IVPP 近くの西苑飯店で開催されました。飯店は、酒店と同様に、ホテルのことです。原人を想う詩の朗読や合唱団もあつて、華やかでした（スライド）。基調紹介として、創設のころの先人たちの解説がありました。楊鐘健(1897-1979)、裴文中(1904-1982)、賈蘭坡(1908-2001)、周明鎮(1918-1996)、吳汝康(1916-2006)など、中国古人類学の確立者といってよい面々が、IVPP 先達ということで、私も研究所についての認識を新たにしました。次いで存命の長老的先生達を紹介されましたが、その中に会議全体の基調講演者、吳新智(Wu Xinzhi、以下ウーシンチ)氏がありました。1928年生まれですので、当日は90歳か91歳です。中国の友人によると、もうウー氏は、公的な場での学会や講演はなさらないとのことで、貴重な経験でした。

ウー氏はご高齢ながら、しっかりした口調で語られました。講演は、多岐にわたりましたが（中国語を英語通訳）、通底する考え方は、中華的な「多地域進化学説」のようでした。続く若手複数の連続講演と併せてご紹介します。Multiregional Evolution（中国語「多地区進化説」）は、1984年に、Milford Wolpoff, Wu Xinzhi, Alan Thorneにより提唱された。このモデルは、遺伝子交換のネットワーク、人口の網目状分布、地域的な絶滅と置き換わり、を仮定する。人口は交雑し、世界の人々はアフリカに起源する少数の単一集団の子孫ではなかった。ヨーロッパ、近東、アフリカ、そして東アジアなど、新人への進化過程は、それぞれの地域で非常に複雑に進行した。中国大陸をまとめると、約30万年位に画期が認められ、それ以前、それ以後、それぞれに連続的な人類進化があった。前半には藍田人、周口店直立人（北京原人）、後半には許家窯人、許昌人から、柳江人、山頂洞人への連続性がある（多数の化石人名省略）。

アフリカ単一起源説と多地域進化説

人類学の概説、解説書に親しんで来られた方は、少しドキッとするのではないのでしょうか。1980年代末に、遺伝子の研究から、現在の世界中の人類は、かつてアフリカにいたホモ・サピエンスの一人の女性からつながっているという、「ミトコンドリア・イヴ」仮説が提唱されて、その後のゲノム解析の進歩によっても、新人はアフリカ起源という「単一起源（学）説」が定説化しているからです。

私は石器を中心に研究してきて、古人類学は専門ではありません。しかし、石器を始め文化的な事象をつぶさに見ると、世界は地域差に満ち満ちている、そして地域がまとまって広範囲な文化圏を構成する場合、変遷・移行は連続的に同じペースであるのではなく、時間的にも空間的にも、まとまりと断絶が存在する、という認識を持つてきました。地域ごとのフィールドワークと、地域間の比較研究とを、いわば研究の車の両輪のように考えてきました。

後期旧石器時代への変化（新人の文化への変革）を考えても、世界の多くの地域では、違った状況が存在していました。韓国では、後期旧石器になっても、それ以前の石器型式と技術（大型の石英製石器各種など）が、新人的な石刃石器と共存します。日本では、諸説ありますが4万年前以前からの伝統も残存しています。ヨーロッパでは、一気に石刃石器群に変化し、洞窟壁画の突然の出現など、ネアンデルタール人とクロマニヨン人の「交替劇」が演じられます。南中国や東南アジアでは、粗雑な石器が長期間にわたり継続し、新人の時代も同様な石器が残ります。

要点をまとめてみましょう。現生人類（新人）の起源については、学界にも多くの学説が存在しますが、大きくとらえますと、「アフリカ単一起源説」と、「多地域進化説」の二つに大別できます。文字通りですが、前者は、新人はまずアフリカで進化を遂げて、その集団がアフリカを出て、全世界に拡散し、今の人類になっている、というものです。後者は、もう少し複雑なプロセスがあり、各大陸に生息していた先行人類もそれぞれ進化をし

ていて、結果的に現在のような一つの人類になった、というものです。19世紀後半の、ダーウィン学説以来の進化論の原理は、突然変異と自然選択（自然淘汰）が生物を変化させるというものです。が、極めて多様な地球環境の中で生存を続け、しかも文化的な装備を、生存の大きな手段としていた人類でした。原人も、旧人も、それなりに石器を製作しており、世代を超えて受け継がれていました。長期間、広範囲に生息していた人類のうちで、単一の系統のみが、どんな地域でも他を選択的に圧倒していた。その系統以外は、すべて消えた、という考え方（たいへん単純化していますが）は、自然なのかどうか、以前から一抹の疑問が消えずにいました。

アメリカ考古学会がホノルルで開催された時、（2013年）、記念講演を聴いて印象に残ったことがあります。ハワイ大学マノア校の講堂で、イギリスのクリス・ストリンガー教授が、単一起源説と多地域進化説とは、たとえば振り子が揺れるように、1980年代から2010年代まで、研究年代によって重点が変わってきた歴史があるというお話でした。同氏といえば、単一起源説の主導者であったはずなので、私も満員の聴衆と共に、考えを深めることができました。

人類の歴史は、今もなお謎に満ちています。世界中で研究者たちの挑戦が続いていますが、なかなか簡単に「謎解き」は完結しません。科学者たちを突き動かしているのは、ある意味で、ロマンの感情なのかもしれません。

新しい周口店博物館と体験館

近年、遺跡近傍に新博物館が建設されました。北京原人の生活が、博物館ではジオラマで再現されています。狩猟を行なう人類、火をコントロールする最古級の人類、石器を製作する人類などの姿が、理解しやすく示されます。なお、火の使用については、異論もありました（アメリカの人類学者ビンフォードの説）。洞窟からは、膨大な動物の化石が出土しています。オオツノシカ、ハイエナ、いろいろな小動物などですが、北京原人が洞窟を利用していた非常に長い年月の間に、動物と人類がどのように洞窟に関わっていたかは、なお議論の余地があります。また、遺跡現地には、青少年向けの内容も多い「体験館」が新たに作られて、最新設備のモニターや動画展示などが充実しています。太古の人類の狩猟活動が、実感をもって理解されるような展示です。

明石で発見された「日本原人」

日本列島では、「明石原人」の物語が関心を集めてきました。1931年4月に兵庫県明石市西郊の西八木海岸で、在野の研究者であった直良信夫が発見した、人類の腰骨（左寛骨）です。直良氏は、環境の良い明石で病氣療養中でした。当時の学界では黙殺というか、表に出なかったのですが、写真が撮影され複製標本が作られていました。戦後1948年に、東京帝国大学に保管されていた石膏模型をもとに、長谷部言人（ことんど）は、原始的な特徴を認めて原人段階に列するものとししました。ニッポナントロプス・アカシエンシス（明

石の日本原人の意)の通称が与えられ、同年に出土地点の近傍で発掘調査が行われましたが、化石や石器の発見はありませんでした。原資料は、1945年5月に東京大空襲により焼失していました。腰骨は確かに化石化が進んでいたという、専門家を含む観察所見は、もはや確かめることはできません。

腰骨の発見に先立って、直良氏は8点の石器も採集していました。交互剥離で刃部を形成したチョッピング・ツール、片刃のチョパーが含まれていました。焼け跡から回収された資料です。氏は、専門誌である『人類学雑誌』に「播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品」という論文を発表(1931)したのですが、学界の指導的人物により否定的見解が投げられました。

その後、1982年に腰骨の再計測と多変量解析により世界各地の出土骨と比較がなされ、現代人の範疇に含まれるとの新解釈も出されました。1985年には、春成秀爾氏を中心に国立歴史民俗博物館が西八木で発掘調査を実施しました。加工した痕跡がある木片が出土し、また化石が出土していた西八木層の形成年代は、各種の自然科学的な分析を総合的に考えて、6~7万年と推定されました。木製品は、ハリグワという樹木の柾目(まさめ)の板で、長さ約30cm、植物専門家からも人工品と結論づけられています。

明石人をめぐっては、多くの間人ドラマが含まれており、出版物も多数あります。直良信夫著『学問への情熱—明石原人発見者の歩んだ道』は、自伝です。巻末には直良氏の著作目録があり、合計612編の多数の図書や論文が掲載されています。直良氏は幅広い研究分野を持つ「博物学者」(春成氏による)でした。早稲田大学教授となり1972年に定年退職されました。1985年に83歳で逝去された氏の人物と生涯については、直良三樹子氏(作家)が、娘の立場から書かれた伝記『見果てぬ夢「明石原人」—考古学者直良信夫の生涯』が感動的です。

「謎の人類」

講座では、あらためて発見と評価の歴史の要点をたどってみました。いくつかの不運に見舞われた明石原人は、現在も「謎の人類」のままです。発見当初の新聞記事(大阪朝日新聞、昭和6年5月3日付)の見出しは「三、四十萬年前の人體の骨盤現る」とあり、長谷部による再評価も原人段階の可能性を指摘しました。しかし、海岸の崖面(スライドは当時)から出土する化石骨の研究を重ねていた直良氏が、砂質粘土層が崖下に崩壊した土の中から発見した、その層位は6~7万年位に位置づけられるので、旧人段階まで下がるものです。再調査で木製品が出土しました。少数ですがこれまでに発見された石器は、日本列島の前期旧石器時代(世界的には中期旧石器時代)の石器と共通する特徴が認められます(諸説あり)。骨の形態の再計測による「現代人説」は定説化していますが、現物は失われ「化石化」は検証できません。地層の推定年代からは北京原人系統のホモ・エレクトスとは言えない位置づけになります。あるいは、新人の渡来(約4万年前)直前の、先駆的な古新人類的存在という可能性は、全くないのであろうか、との館長の疑問は残ります。

明石人のすべてを否定し去ることは難しいのではないのでしょうか。

日本列島最古の人類を探る歴史

「明石原人」が発見された頃（ちょうど北京原人の頭蓋骨が発見された 2 年後でした）の日本の考古学では、旧石器時代の存在さえも知られておらず、最古の列島人は、縄文人だったという定説でした。1949 年に相沢忠洋の発見から岩宿遺跡が発掘調査されて、その後 10 年ほどで後期旧石器時代の文化内容と変遷の大要が明らかになりました。また 4 万年前を遡る、前期・中期旧石器時代についても 1964 年以來の探求と論争の歴史があり、現在も継続しています。この問題については、令和 3 年度館長講座概要、第 3 回「**ホモ・サピエンス東北へ**」で詳しく論じていますので、当館 HP にて、講座概要をご覧いただければ幸いです。

館長の独自仮説として「**小集団連続絶滅仮説**」を提示しています。少なくとも旧人の段階の時代に、アジア大陸から流れてきた古人類の小集団は、ホモ・サピエンスには遠く及ばない低い適応能力しか保有せず、島嶼部における様々な不利な条件のなか、長期的に絶滅の運命をたどったかもしれない。小集団間の出会いは少なく、長い間に文化力の伝達は退化し、石器は粗雑化し、資源条件の振幅に対しての、広域の移動という方策は限定され、やがて子孫集団が継続できない状況に至ったとの仮説で、日本列島の遺跡の状況説明として考えております。（なお、学界では、4 万年以上前の日本列島は、全くの無人状態であったとの多数派学説のように、諸説あります）。

おわりに

いずれの国にあっても、その国土に初めて人類が現れたのはいつ頃だったのだろうか、という問いは、根源的な質問といえるかもしれません。また、その人類たちは、どこからやってきたのだろうか、という問いも、市民的な関心を集めてきました。私達は何者で、どのように存在するようになったのか、答えが難しい問いです。人類学者としての発想ですが、このような問いかけは、実は我々ホモ・サピエンスに特有の思考のように思われます。私達は何者なのか、説明を求めるのです。これは、新人が現れてからの「後期旧石器時代開始の文化的革命」（令和 3 年度館長講座概要 第 4 回「**氷河時代のハンターたち**」参照）による人類の文化進化がなせる技（わざ）による、「説明の希求」のひとつのようです。かくして我々新人は、厳しい環境変動も乗り越え、社会的紐帯を確立維持し、将来を見据える時間的思考を日常化し、そして全世界に拡散を遂げたのです。

古来、どの民族も、自民族の起源神話をさまざまに創出してきました。自分たちを説明したい、周囲の世界を説明したい、取り巻く自然現象を説明したい、このような情念は、人間の本質なのです。現代文化人類学の確立者の一人、機能主義人類学のマリノフスキーは、『呪術・科学・宗教』という名著を残しています（原著 1948）。話を戻しまして、日本列島最古の人類をめぐる問題、照葉樹林文化論（雲南省）など日本文化の系統をめぐる問

題、沖縄経由の「海上の道」（柳田国男）の提唱、アメリカ大陸のパレオインディアン文化を遡る、先行文化の存否問題、インド・ヨーロッパ語族の起源問題、その他さまざまな市民的関心を集めるトピックも、あるいは我々新人（ホモ・サピエンス）の一大特長が、現代に顕現したものとも見ることもできるのかもしれませんが。こう考えますと、「ロマンと科学」とは、実は同じ情念が働いている心の働きのようにも思われます。

本日も、ご清聴いただき、有難うございました。

[呉新智氏は、2021年12月にご逝去されたとのこと。謹んでご冥福をお祈りいたします。]

（本稿は、当日スライドも踏まえ、講演内容に補足して加筆し、再構成したものです。令和3年度講座との関連も説明しました。また参考文献は、日本語の入手・閲覧しやすいものを選択しています。）

参考文献

阿子島香（2005）「第4節 旧石器遺跡発掘ねつ造問題」『仙台市史 通史編1 原始 旧石器時代改訂版』、98-129頁。

加藤晋平（1988）『日本人はどこから来たかー東アジアの旧石器文化ー』岩波新書。

芹沢長介（1982）『日本旧石器時代』岩波新書。

直良信夫（1995）『学問への情熱ー明石原人発見者の歩んだ道ー』岩波書店。

直良三樹子（1995）『見果てぬ夢「明石原人」』時事通信社。

春成秀爾（1994）『「明石原人」とは何であったか』NHKブックス。

樋口隆康（1969）『北京原人から銅器まで』新潮社。